

かこのおもいで

わたしには、名前がありません。

だからと言って不便に感じたり、名前がほしいと思った事ありません。名前など、必要ないのです。

あっても、ない事と同じ。

なくても……

どちらにせよ、わたしたちは忘れられてゆく。

そう。

忘れられて、わたしたちは生まれ変われるのです。

★ ☆ ★ ☆ ★

空が蒼い。空気は、やや涼しい。

夏休みもすっかり終わり、6月の中旬。昼休みの屋上は、とても居心地がいい。校則だらけの学校でも、屋上だけは思う存分に呼吸ができる。

「ケースケ？」

「ん」

呼ばれて、ぼくは自分が眠っていた事に気付いた。

「おはよ」

「……おはよ」

ハルは仰向けで寝転がっているぼくを、仏頂面で見下ろした。

「呼んどいて、一人で昼寝かよ？」

彼はそう文句を零し、乱暴に腰を下ろすとズボンのポケットからタバコを出す。100円ライターで火を点ければ、おいしそうにハルの目が細まった。

ハルは、ぼくと小学校が一緒だった。中学は別々になってしまったけど、高校でまた一緒になった。

「あっつー」

シャツの第2ボタンだけでなく、第3ボタンまであけながらハルはまたタバコを吸う。

どこか遠い、空の向こうを見ていた目がぼくを睨んだ。

「いつまで寝てんの？ 話があるんじゃないかったっけ？」

いつも通りのイライラ口調が、今日はやたらと安心できた。

「……ケンカしちゃったんだ」

起きたぼくはハルと向かい合ってあぐらをかいた。

始め、ハルはきよとんとした様子だった。ぼくの切り出し方が悪いのかもしれない。けれど、ハルは最小限の言葉だけで、いつもぼくの悩みを汲み取ってくれる。

んー。ハルが眉間を寄せてうなった。

ふと、彼の目の様子がおかしい事に気付く。ぼくを見つめていた視線が、少し左にずれた。

つられて、ぼくも自分の右肩を振り向いた。

「？」

何もない。

「アキ……つつつたっけ、カノジョ？」

「うん、そう」

慌ててハルを見て、頷いた。

「ケンカとか無縁そうに見えたけどな」

「初めてだよ」

「だらうな」

ハルがタバコを口に当てたため、少しの間が空いた。

「もう少し、自分を押し出してもいいんじゃないかねえの？」

主流煙を吐きながらハルが言った。

「ケースケの性格からすると、カノジョの言葉に従うタイプだろ？」

的確な指摘に、ぼくは頷くしかできなかった。

「向こうの言い分を最優先にして、ケースケはそれに合わせるだけ。従順かもしれないけど、おれから見ればただラクしてるだけにしか思えねえな」

ぼくはうつむいた。アキに嫌われないように同調してきたぼくは、彼女からしてみれば『いい加減な男』にしか映っていなかったのかな。

そうやって落ち込むぼくの頭を、突然ハルが叩いた。

「いたっ」

『優しい』と『好き』とは違うんだぞ？ 『好き』だからこそ出せる言動が、今の

おまえには足りない」

「……？」

真剣なハルの口調だけど、意味がはっきりとはつかめなかった。

あー。苛立たしそうに、ハルが頭を掻く。

「頭で考えようとすんな。そのうちわかる時が来るだろうし」

ハルは無理やり（少なくとも、ぼくはそう思う）そう結論付けた。

「ケースケだってカノジョに言いたい事、あるだろ？ この際全部ぶちまける。ただ仲直りしたって、このままだとまたケンカするって、絶対」

「……うん、そうするよ」

素直にぼくは頷いた。

心の中にあつたワダカマリがすっきりした。ハルに相談して、ハルからアドバイスしてもらっただけで、これまで何度も助けてもらっている。学校の先生たちの評判は悪いかもしいけど、ぼくにとっては、それはもう頼りになる友人だ。

「やっぱ、ハルに相談してよかった」

「あ？」

「こういう経験、多いじゃん？」

冗談めかして言ったら、ハルは少しだけふてくされた。

★ ☆ ★ ☆ ★

「次の授業は？」

「サボる」

「ん、そう。じゃあ、ぼくは教室に戻るから」

そう言って、屋上から帰るケースケの背を見送って、おれはごろりと寝転がった。

ふと、ケースケの性格を考えてみる。

温厚ではあるけど、優柔不断。

手先は器用、人間関係が不器用。

そのくせ、世話好きな17歳。

あいつ自身は、そんな性格が嫌だと言っている。

けど、おれは少しうらやましい。おれにはない——何て言うか……あたたかいもの、を持っているから。

もう少し、自分に自信を持ってもいいと思う。

はーあ。ため息と一緒に上体を起こした。すっかり短くなったタバコを、地面で引っ掻いて火を消す。

「あんなヤツだけどき、いいところもあるわけよ。おれにとって数少ない、本音で付き合えるヤツだし」

タバコを屋上の外に放って、おれは呟いた。視線の先は、さっきまでケースが座っていたその向こう。

一人の少年が、そこに立っていた。10歳ほどに見える、幼い少年。サイズの大きいTシャツと半ズボンの少年の顔には、ケースケの面影がある。

「ケースケはきつとうまくやれる。だから、安心しな」

少年があどけなく笑った。その体が淡く発光し始める。青の混ざる澄んだ光が、少年の昇華を示す。

「おれんここに来るのはいつでもいいけど、次はもう少し大人になって来いよ」

おれは手を振って、光の粒子に砕けたそいつを見送った。

細かい粒はすぐに空気に溶け込んで消える。10秒と待たずに、おれの前からすべては消えていた。

何気なく、空を仰ぐ。

蒼い空は、いつ見たってノンビリしている。思わず引き込まれそうになるぐらい、大きな威厳を持って。

「勉強なんて、馬鹿馬鹿しい」

独り言を呟いて。

おれは大の字に引っくり返った。

「かこのおもいで」
Written by nakoso
© nakoso 2008

Release Date 2008/11/20 on Bottle Novel
<http://bottlenovel.blog.shinobi.jp/>

Twitter (as inabetz) :
<http://twitter.com/inabetz>

Mail :
nakosokan@gmail.com



「かこのおもいで」 by nakoso is licensed
under a Creative Commons 表示・非営利 2.1 日本 License.

Based on a work at <http://bottlenovel.blog.shinobi.jp/>